白糠のアイヌ語地名

和天別川筋のアイヌ語地名

第１回

私たちが普段使っている町内の地名の多くは、アイヌ語に由来しています。豊かな自然の中から生まれたアイヌ語地名は、その土地の様子を端的に表し、様々な情報を伝えてくれます。

今回から、昭和60年に発行された白糠地名研究会の『白糠のアイヌ語地名』をもとに、和天別川をたどりながら「フレナイ」「トビウカウンナイ」「ムキサニソーカ」「イオロウシ」「シャチホロ川」「コイカクシワッテ」について、その由来やまつわる話題を紹介します。

○フレナイ

「フレナイ」は、和天別川の河口から５００メートルほどさかのぼったところで西に分かれている川です。

「フレ（赤い）・ナィ（川）」という訳は、『茶路川筋のアイヌ語地名』第３回で紹介した「フレペツ」と同じです。「赤い川」は湿原に見られる川で、川の水に含まれている鉄分が細菌によって酸化され、その細菌が死んで川底にたまった酸化鉄の色が赤茶色（鉄が錆びた色）であるところからそう呼ばれるようになりました。

この地名は道内各地にありますが、「水が赤く濁った川」であることから、その多くには、昔、アイヌの戦いがあって、その戦死者の血が流れて川になったという伝説が残されています。

○トビウカウンナイ

「トビウカウンナイ」は、和天別川にかかる下和天別橋のあたりから南西に向かっている川で「トビ＝トパ（カラス貝）・ウカ（かさなりあって）・ウン（ある）・ナィ（川）」という意味があります。

言語学者・知里真志保博士のアイヌ語辞典では、カワシンジュガイの項目で、「トパ」を「トー（沼）・ピパ（カラス貝）」と解いて「カラス貝」と記しています。そして「カラス貝が沼に入ると、皮うすく実赤くなる。それを大川へ戻すと、１年位でもとにかえる。ゆでたり、干したりして年中たべる」と説明しています。

【参考・引用／『知里真志保著作集』別巻Ⅰ「分類アイヌ語辞典 動物編」】

■カラスガイとカワシンジュガイ

カラスガイは、イシガイ科の淡水貝で、貝の後背部が波状になっています。表面が褐色から暗褐色であることから「カラス」の名がついたと言われており、海抜１００メートルよりも低い平地の池、湖、河川に生息します。

また、カワシンジュガイは、カワシンジュガイ科に属する淡水貝で、漢字では「川真珠貝」です。本州と北海道に分布し、イワナやヤマメなどがいる渓流に、数個で固まって生息します。

この生息の様子が「トビウカウンナイ」の「ウカ（かさなりあって）・ウン（ある）」という表現になり、川底にカワシンジュガイが群生していることを伝えています。

【参考・引用／『標準原色図鑑全集３「貝」』・Ｗｅｂサイト『貝の図鑑』】

▶カラスガイ

▲カワシンジュガイ

出典：国土地理院ウェブサイト